

グリムの「盗賊婿」(KHM 40)

飯 豊 道 男

1

グリムの『子どもと家庭の昔話』には世界の人々によく知られるようになった話と、そうでない話がある。「盗賊婿」は一向知られることがない、地味な、そして気味の悪い話である。

もともと兄弟の採話活動の歴史の中では、これは数少ない最古の話の一つで、ヤーコプが書いた一八一〇年の原稿が残っている。それが一八一二年の初版第一巻に収められた時には一八行もふえてい

る。
その後の二版(一八一九)から最後の七版(一八五七)までの間では、同じ語句、文で書き加えられた箇所があるし、二版でふえ、三版(一八三七)でふえ、四版(一八四〇)から七版まで表現が変わった箇所もある。三版から七版までの間にふえた箇所もあれば、三版から五版(一八四三)までにふえた箇所もあり、六版(一八五〇)から七版にかけてふえた箇所もある。四版から五版にかけて手を加えられた箇所もあるし、大幅に変わった文も数箇所ある。⁽¹⁾

このように絶えず手直しされながら終始四〇番として存在し続けたのだから、別に軽視されたとも思えないが、それでもグリム兄弟が普及版の五十の昔話(一八二二)に入れなかったのは、これを昔話を代表する話、伝承にとつて見落とすわけにいかない話とまでは考えなかつたからだろう。

この話にはヤーコプの原稿のほか、兄弟が昔話研究に入るきっかけを作ったプレントナーの、一八一〇年以前の原稿も残っている。

ある王の娘がある伯に求婚される。その伯は森に城をもっている。彼女は彼がうさぐさい気がするが、供の女をつれて森にいき、城を見つける。最初の部屋には剣、二つ目の部屋にはピストルがいっぱいあり、三つ目の部屋には血でいっぱいのはちまきと伯のベッドがある。連中がくる足音を聞いて彼女はベッドの下に隠れ、供の女は地下室のドアの前に隠れる。盗賊どもは一人の娘を(切り始め)引きずって、指輪をはめた小指を切り落とし、それがベッドの下に落ちる。犬がベッドの下にとびこむと、盗賊どもは犬が指を食べたと思ひこむ。実は犬に王女がコラッチェ(アンズジャム入りのサンド

ポッチを揚げた)をやったのだ。盗賊どもは娘を切り刻んでゆかにごろ寝する。王女はそつと逃げ出し、ベッドにぶつかると盗賊どもの争い。暗闇の中だ。彼女は供の女とわが家に帰る、父にすべてを話す。伯が招かれ、彼女がこうしたすべてを夢のこととして話して聞かせると、彼は夢はうたかただという。彼女が指を突きつける、彼は彼女を殺そうとし、自分が処刑される。

これが全文である。それに対しヤーコプの書き残した原稿はもつと昔話らしい姿になっている。

昔、王女が王子と婚約した。花婿は何度もどうか一度城を訪ねてきてほしい、と頼んだ。けれども彼女は森の中で迷い子になるのがこわくて、いつもはねつけていた。すると王子はどの木にもリボンを結んで絶対道をまちがえないようにする、と約束した。それでも彼女は長いことほうっておいだが、しまいに受け入れるしかなくなつた。

とこういう第一節で始まる。それが初版第一巻のヴィルヘルムの文ではこうなる。

王女が王子と婚約した。彼は何度もどうか一度城を訪ねてきてほしいと頼んだ。けれども彼女は道が大きな森を通っていくので、中で迷い子になるのを心配し、いつもはねつけていた。そんなことが心配なら、と王子がいった。きつと何とかしよう、どの木に

もリボンをやわえて、全く道がわからなくなることがないようにしよう。それでも彼女は心ひそかに気味悪がついていたかのようにしばらく引き延ばそうとしていたが、しまいにいるんな言ひ訳の種もつきて、ある日、旅に出かけていくしかなかった。

ヴィルヘルムの方がこのようにいつも長くなる。簡潔さよりもわかり易さを旨とし、全体を論理化して飛躍をなくしている。ヤーコプの第二節が「彼女は森の中をいき、大きな家の前に出た」と始まっていたのが、ヴィルヘルムでは「朝から晩まで彼女は長い、長い森を通つていき、やつと大きな家の前に出た」となつて物語性を高めている。しかし大筋はヤーコプの原稿も初版第一巻も、どちらもブレントナーが書き残したメモを内容としている。

それが二版——最後の七版までこの話の基になつた——になると、花婿になる男は森の家への道がわかるように灰をまこうといいだし、娘は娘で道しるべ用にエンドウマメとレンズマメを用意する。というように初版よりも細部に工夫が凝らされているのに気づく。娘が家につくと初版に出てこなかつた鳥が登場し、娘に早く帰れと警告するし、留守番のお婆さんはこのあるじが盗賊で、一味は彼女をかまゆでにして食おうとしているのだと教える。初版では人食いが王子だけだったのに、今度は一味にまで拡大されて恐怖を増幅させる。初版では王女の祖母がさらわれてきてすぐに殺されたのに、二版ではそれが若い娘になり、彼女は白と赤と黄のワインを飲まされ、心臓が破裂して死ぬ。こんな箇所は子どもを配慮したのかもしれない。お婆さんが連中のワインに眠り薬を入れてくれたおかげで、彼

女は家を抜け出し、お婆さんと一緒に芽ぶいたエンドウマメとレンズマメを道しるべに逃げ帰る、というグリムの昔話らしい特色をもつ話になっている。

がしかし、全体の構造は変わっていない。変わってはいないが、グリム兄弟は初版と二版で取り上げるテキストを変えていたのである。初版の自注は「盗賊婿」については何もふれていないが、一八二二年に出た注釈篇である第三巻は、二版のこの話がニーダーヘッセン——この場合兄弟が暮らしていた都市カッセルを指す——で聴いた二話の混交であることを明記している。

二版で著しく変わったのは冒頭の部分である。

昔、水車屋がいて、美しい娘があった。ところで彼女が大きくなつてくると、彼はちやんとした人がきて縁談を申し込んだら、娘をやつて彼女の面倒を見てもらおうと思つた。

というように、女主人公が王女から水車屋の娘に変わるのである。それにつれて王子も「大金持ちらしい」人物に変わる。これが二版で目立つ変化である。初版も二版も話の展開は変わらないのに、グリム兄弟に新しいテキストを選び直させた動機は何なのか？ その手がかかりとなりそうなのは、自注に「カロリーネ・シュタールの昔話の中に『水車屋の娘たち』がある」といつている箇所があることである。シュタールの本はボルテとポリフカの『グリムの昔話注釈』(B.P.)によれば、一八一八年に南独ニュルンベルクから出版された本だが、グリム兄弟はこうしたものからこの話が本来は水車

屋の娘の話として伝承されていたことに気づいてテキストを変えたのではないかと想像させるのである。

事実、B.P.のあげるグリム以降の採話は、シユワーベン「盗賊の、人殺しの城」、チロール(オーストリア)「にせの花婿」、ロートリンゲン(ロレーヌ)「騎士ボードのこと」、西ヘッセン「水車屋の娘」、テューリンゲン「思ひ上がった花嫁」、北独「盗賊の嫁」、盗賊の家、「人殺しの伯」、ホルシュタイン「髪がみどりの盗賊のかしら」、ボンメルン(現ポーランド領)「商人の娘」、ポーゼン(ポズナニ、現ポーランド領)「気丈な水車屋の娘」、東プロイセン(現ソ連・ポーランド領)「水車屋の娘とみどりのひげ」というように、水車屋の娘の話になっているものがよくある。グリム兄弟はこうした後代に発表された話を知らなかったろうが、水車屋の娘の話とするのが伝承に忠実であることに気づいてこう変えたのかもしれないのである。

しかし初版の王女の話から二版の水車屋の娘の話となることによつて、話は語り手と聴き手にすれば一挙に身近になる。どこか遠い世界の話であつたのが、語り手や聴き手の生活する場の、共同体の内側の話の財産という意識が生じるだろう。共同体の外側にあるもの同士の話だつたのが、水車場というなじみのある世界の人間が、盗賊という未知の、異質の世界の人間と接触する話になつたことになる。日常生活で起こりうる事件の話になつたことになる。人々はこのように好んで話を身近なものに引き寄せる。「引き寄せ」によつて話が身近な要素から組み立てられると、話の生命は長寿を保証されることになる。

水車屋の歴史は古く、例えばヘッセンのキンツイヒ川流域では一八五五年に水車場のことが記録に出てくる。パンづくりには欠かせない粉をひく水車屋は裕福になる可能性もっていた。農民と水利権でもめ、量目でもめたりした。一七五三年のシユタイナウ——グリーム兄弟が幼少年期をすごした小さな町——の条例は湿らせるなどして目方をふやさないと、客の目の前で量ることなどを決めていた。『水車場では袋が物をいえないのが何よりだ』とか、『水車屋とパン屋は盗まない、人が物をもつてきてくれるからだ』といった古来のことわざは利用者の不信を物語っているが、水車場は暮らしに欠かせないところであると同時に、大抵村から少し離れたところにあつて、地理的にもそして精神的にも特殊な地位を占めていたように思える。

この話でもう一つ重要な役割を担う盗賊についても少しふれておくと、ドイツでは盗賊は三〇年戦争（一六一八—一六四八）後にふえた。グリーム兄弟の少年期に起こった同盟戦争の時にもそういう現象があつたらしく、フランスの脱走兵をよそおつてマルセイエーズを歌い、鉄砲を撃ちながら狙つた家を襲う盗賊の一味もいた。ライン川、モーゼル川のあたりで暴れ回つていた有名な盗賊のかしらはシンダーハンネスといつたが、一八〇三年マインツで処刑された時、死刑となつた配下は一九人、懲役刑となつたのは二〇人、所払いが二人という大集団だつた。『シユタイナウ町史』を見ると、ここでも一六八一年に馬などに乗つた三〇人組の盗賊が町の門前で追い返されている。近くは一八〇八年、シユタイナウ近くの森の道で一八人のユダヤ商人が七人組に襲われているし、ユダヤ人が追いはぎと

なつた例もあつた。フランクフルトからライプツイヒに至るこの街道にはよく追いはぎが出没したらしく、一八三二年にはそういう道の左右の森を伐り開いて明るくするようにという達しが出ていた。追いはぎの手引きをした町内の錫職人がつかまつたことがあつたし、一八〇八年につかまつた一味は靴屋をおかしらとしていた。⁹⁾ それでもやたらによそ者を泊めないようにというお触れが一六一四年など、何度も出されている。

『ドイツの盗賊と泥棒、一八・一九世紀初期の組織された一味』に依ると、一八〇六年から一八一五年までの九年間にバイエルン王国で裁判所の厄介になつた者は、殺人一九三、追いはぎ一七八、放火殺人四七、泥棒六一五六、詐欺一三八九、密輸九五五、国内逃亡兵七七九五、国外逃亡兵四三四四九、脱走新兵五二二九、男性浮浪者六七三四三、女性及び子どもの浮浪者四二七四三、密猟者四八五、材木窃盗者一六〇四、行商人四八二二、警察の規則違反者四〇六七三、物乞い四六六三一名となつていて、盗みを働く者の数は決して少なくなく、他人事と思つていられない脅威であつたことが想像される。こそ泥から大物まであたりに徘徊し、出没し、油断も隙もあつたものではなかつたのだから。しかしそれにしてこの統計に出てくるうさんくさいよそ者たちは、何と口承文芸になじみ深い人たちであることか。昔話は王家の光輝と光榮と共に、悲惨と貧困の中にしっかりと根をおろしていたことを思わずにいられない。

昔話の中にはよくとんまな手下が狙つた家にチョークで目印をつけたのに、利口な女がそれを消したり、近所じゅうに同じしるしをつける話が出てくるが、この本にはそういう印が八種類入りで紹

介されている。こういう手口は昔話の発明でなかったのである。昔話がしばしば現実に基づくものによって構成されていたことがこんなところからもうかがえる。

押しこみも非常に用意周到に行われた。一七人から二〇人のグループの一例をあげると、二人が夫係り、二人が妻、二人が下女、二人が金探して、部屋のドアの前に見張りが一人、階段口に一人、玄関のドアの前に一人、残りの者は家の周囲を見張っていたという。

また頭目が「美しいカール」といわれた例があるように、しばしば好男子だったらしいことも見逃せない。一七五九年につかまつたある頭目は、背が高く、すらつとしていて年齢は四〇歳位。さつぱりとした顔立ちで、ひげはなく、数か国語で字が書け、ヴァイオリンその他の楽器がひけたという。「盗賊婿」でもかしらはよく色男といわれている。虚構の物語が迫真性をもつのは、語り手にも聴き手にもこうした事実の見聞と経験があつたからかもしれないのである。

しかし「盗賊婿」という話は決して気持ちのいい話ではない。娘がいつわりの結婚詐欺師にひつかかつて死ぬ思いをするのが、なぜ語るに価いするのか？ 血みどろの部屋を見てしまう恐怖が、聴き手の「ぞつとしたい、ぞつとしたい思ひ」を満たすのか？

結婚相手の恐ろしい正体を知る話なら、すでにペローの「青ひげ」があつた。「青ひげ」が「盗賊婿」と無縁でないことはBのあげている話名の中に「髪がみどりの盗賊のかしら」とか「水車屋の娘とみどりのひげ」があることが示しているが、話としては「盗賊婿」よりもこちらの方がはるかによく出来ている。ただペローの

「青ひげ」が世俗社会の話になつてのに対し、グリムでは盗賊は森に住み、人食いといわれ、鳥が娘に警告するなど、一七世紀のペローよりも古い伝承の姿をとどめているように見えるが。

ぞくぞくしたいのだったらグリムにも「青ひげ」を思わせる「フィッチャーの鳥」(四十二)がある。見るあの部屋をのぞいた花嫁が血と死体に驚いて夫に渡されていた卵を落とし、血の色が取れなくなって三人姉妹のうち二人までが殺される話である。

「盗賊のかしらと水車屋の娘たち」という話の中には、こういう「フィッチャーの鳥」の話を内容としているものがある。一八五二年に出たマイヤーの『シュワーベンドイツ昔話集——民衆の口伝えからの採話』⁽¹⁾にある話である。ただ「フィッチャーの鳥」と違ふのは逃走場面が出てくることである。二人の姉を殺した盗賊をつかまえたあと、裁判官は一味もつかまえないといひ、未娘が道案内を務めるが、彼女は途中ではぐれて一味につかまり、松やにでゆでられることになる。しかしおかしらの老母が同情してそのなわをほどいてくれる。樽のたがを積んだ馬車、樽を積んだ馬車の御者はかくまうのを拒むが、三人目の井戸のふねを積んだ馬車の御者がかくまってくれ、のちに彼女はこゝの勇ましい御者と結婚した。

この話は後注によると、小冊子によってシュワーベン地方にかなり広まっていたそうである。これもグリム兄弟のように二つの土地の話をまとめた話なのだが、編者は女性の語り手も男性の盲人の語り手も口伝えされていたものを語ってくれたといつていい。盲人の語り手が一九世紀にいた事実も興味深い、血なまぐさい話が広く受け容れられていたことも興味深い。それにしてもどこにこうい

う話が広まる魅力があるのか？ 昔話の伝承にははずみをつけ、力を与えるのは何なのか？

例えば逃走場面の長さが聴きどころになるのか？

ここに登場する馬車の荷はいかにも隠れ易そう、同時に日常目にする機会があった物だろう。グリムではどうもこういうさりげない日常生活の品物があまり出てこなくて、生活感が稀薄なのだが、こういう道具立ては聴き手に虚構の危機を真実の危機として実感させることにはならないのか？

グリムの「盗賊婿」が地味な話に終わっているのは何か足りないからではないのか、それは何かの要素が加わらなければ広まることのできなかつたのではないか？

そのためか、水車屋の娘の話にはこれまでと違う語り方をするものがある。B₁が「盗賊婿」の注釈でこれにはもう一つ娘の勇気を強調する特別の発端をもつものがある、といっている話である⁽¹²⁾。このタイプの一九世紀の例にグリム兄弟のお膝元のヘッセンの「盗賊の花嫁」がある（『ヘッセンの民間文芸、伝説・昔話・笑話・こっけい譚』一八六九年所収⁽¹³⁾）。

水車屋が金持ちなのを知って盗賊たちが盗みに入る折りをうかがっている。水車屋が結婚式に出かけ、氣丈な下女が一人で留守番をしていると、二人の盗賊がやってきて彼女に遊びにいらおうと声をかける。その隙にほかの連中が一人一人入れる穴をあけ、入り始めると、彼女は手おの盗賊の首を切り落とし、胴体を引きこむ。一人入まうまいくが、二人目が怪しみ、彼には頭を傷つけただけで逃げられ、この日から彼女は陽気さを失ってしまう。

しばらくすると身なりのいい男がやってきて彼女に求婚し、二度目には彼女も承知すると立派な迎えの馬車がやってくる。馬車が町や村を抜けて深い森に入ると彼は頭の毛がない部分を見せて正体を明かす。しかし盗賊の家には、家事をしているお婆さんがいて、連中のワインに眠り薬を入れ、彼らが人殺しをした時に血を流す排水溝伝いに逃げなさいと教えてくれる。

彼女は追ってくる盗賊の声を聞くと牧草地の干し草山の下に隠れる。連中はそれを次々に崩すが、彼女が隠れている最後の干し草の山になった時、こんなところにぐずぐずしていられない、といつて行ってしまう。そのあと獣皮を積んだ馬車に隠れた時も危ぶなく難を逃れる。三度目にはこね鉢を積んだ馬車で危機を切り抜けるが、彼女は生涯結婚しなかつたという。

これは同じ「盗賊婿」といっても、明らかに今まで見てきた話と違っている。血が流れるにしても、今度は盗賊の血が流れるのである。娘の勇ましさが讃えられ、逃げる場面も強調されている。シュワーベンの「盗賊のかしらと水車屋の娘たち」の後半の逃走場面はこの話の逃走場面と同じだったのである。

グリムの「盗賊婿」の話はその後のドイツ語圏ではなかなか見つけにくいのに対し、見つかるのは氣丈な娘の話の方ばかりなのである。

2

一九二〇年から四四年に東プロイセン（現ソビエト・ポーランド

領)で口承文芸を採話したグランナスの本に、「七人の盗賊」という話がある。ここでは金持ちの水車屋を七人組の盗賊が襲おうと考へ、下女が日曜日に一人でいる時にやってくる。

第二次大戦後ソビエトとルーマニアから引き揚げてきた人たちの口承文芸を集めたカマンの本にも「盗賊婿」が出てくる。ウクライナから引き揚げてきた女性が語った「盗賊嫁」でも、金持ちの水車屋の三人娘のうち、一人だけが留守番をしている時に二人の盗賊がやってくる。黒海近くのソビエト領ベッサラビア地方から引き揚げてきた女性の語った「一人の盗賊」もかなり長いが同じ内容をもっている。両親が留守で六人姉妹がいる家に一人の盗賊が穴をあけて順々に押し入ろうとする。気丈な末娘が手おので九人の首を切り落とす。一〇人目は負傷させ、一人目は頭の皮を切りつけただけに終る。この話には卵のモチーフが出てきて五人の姉が次々に殺される。そして末娘は皮をのせたユダヤ人の馬車にかくまわれる。ベッサラビアのもう一人の女性が語った「カトリネと盗賊」では、森の中の山林監督官の家でクリスマス前夜に家族が村の教会のミサに出かけ、下女が一人で留守番をしている。このあとの展開が少し変わっていて、外で痛そうな声があるので彼女が窓の外を見ると、雪の上に血がこぼれている。熱いコーヒーを出してやろうとして彼女は外にいる男のピストルに気づき、初めてそれが盗賊と知る。そこでコーヒーで両手がふさがっているからと彼に戸をあけさせ、戸があいた瞬間熱いコーヒーを顔にふりかけ、手おので男の首を切り落とすのである。しかしこれには一人の盗賊しか出てこない。話は彼女の非常の合図でみんながかけつけたところで終わっている。

すぐれた研究者だったヘンセンに一一三話と五〇以上の歌を聴かせたアントン・クルケンフェルナーはハンガリーからの引き揚げ者で、彼も「盗賊婿」を語っている。ここではある家族が旅に出たので、下女が留守番をしている。彼女は堅い砂糖大根を切る刃物で入ってくる盗賊一人一人の首を切り落としたが、やはり最後の二人目のかしらは頭皮を傷つけただけに終る。のちに彼女は彼の家から逃げる時、桶売りの馬車、干し草の馬車に隠れ、そして最後に居酒屋に隠れ、彼が入ってくる場所を大きな刃物で殺す。この語り手は戦後西ドイツに引き揚げたが、先祖はオーストリアのニーダーエスターライヒ州の出身だった。

そのオーストリアでもこの型の話は伝承されていた。私自身も一九七四年の九月にオーバーエスターライヒ州の、シュヴェアトベルク村ヴァインデッグで、カタリーナ・シュヴァルトお婆さんから聞いたことがある。彼女はこの話を「気丈な水車屋の娘たちと盗賊たち」と呼んでいる。

昔はね、そうだったけど、人がみんなクリスマスにミサにいったね、それで、娘がうちに残ったのよ、これが気丈な娘だった。「何でもくるものはくればいいわ」そういつてたの、「私はちつともこわくないんだから」

そしたらほんと、人たちが、うちの人たちが行ったと思ったら、もう水車場でなんだか物音が聞こえたのよ。もう誰かがさ、入ってきたのよ、地下室の窓のところから、下の方から。それで娘は古いサーベルを用意してあったんだけど、すぐに一人の頭を切り

落として、引っ張って片付けたの。二人目がやってくると、バサッ！(Bumst!) そいつのこうべも切り落としちゃった。ま、こうして三人目、四人目って、そりゃたくさんやつけたの。血がね、ごちゃませになって流れたのよ。(さあ、これからどうしよう? 一段落したけど) って考えたの、(まだあとからきたら) そこへ九人目がくるのよ、一〇人目もね。そしたら一〇人目はほんのちよっとかすっただけなの。そしたらそいつは家を回って、台所の窓んところで中へ向かってしゃべったの。

「おい」っていったの「きっとおめえをひつつかまえてやるぞ。たとえ一年かかってもな。お返しをしてやるぞ」

ところがね、これが器量よしの娘でね、器量のいい女の子だったの。嫁にほしいつてのばかりわんさときたの。そしたらある時、お上品な男の人が、指輪をはめて、キッドの艶皮の手袋をしちゃって、山高帽をかぶった人がやってきたの。

父親がいろいろ。「お前、あの人と結婚しろ」「そうねえ、どうも信頼できないのよ」

「まあ」って結婚を申し込んだ男がいろいろのよ、「一度でいいから見て下さいよ、私の城を。是非一度見て下さいな」

というようなわけで、もうどう仕様もないじゃないの。娘はとっておきの物を着てさ、そりゃ美しかった。こうして森の中を馬車で通っていくと、その人がいろいろ。「さ、こっちを見てくれ」帽子を取って、「おれが誰か、覚えがあるだろう」

やにわに娘をつかんで足蹴にしたの。そいつがいろいろの、「さあ、死んでもらうぜ」

根城につくと、「開け、ごま!」っていつて、山の中の城に入っっていたのよ。「さあ」って一味がいつたの、「即刻こいつの首を切り落とそうじゃありませんか」「いや、いや」えらいのが、盗賊のかしらがいっただの。「おれはな、ゆっくりしたいんだ、何はさておき食うことにしよう」っていつたの、「そう、せくな」でね、地下室に娘を押しこめたの。

そしたら奥で声が聞こえたんだって、箱の中から声が聞こえて、いうんだって。「お前さんにはまだ助かる道がある。私は押しこめられてるけど、お前さんにはまだ助かる道がある」って彼がいつたんだって。「いくんだ、右へ、その大きな暖爐から抜け出せ」って。

そこには刃物がたくさん食いこんでてね、暖爐にもぐって出ようとする、足を随分刺されたの。暖爐を、というより煙道を出たら、大きな犬がつかまれてね。で、それにうまいこと声をかけたんで、通してくれたんだって。それから森の中に、ほんとに走りに走ってね、どこかの木にかまわずよじ登ったのよ。

ところで、盗賊たちがその後の様子はどうかって、娘のいるところを見たら、もぬけのからなの。むろん直ちに馬と犬であとを追っかけてね、槍で木を突いたの。いないのよ。で、また引き返していつたの。根城でマントを見たら血の跡がついてるじゃないの。

そうこうするうち水車屋の子は、水車屋の娘は、降りて炭焼きのところに入ったの。馬車が数台止まってね、すぐにかくまってもらえまいかって頼んだの、盗賊に追われてるもんですからっ

て。

「いいよ」ってその人がいつてね、「知らん顔してやる。お前さんはさ、馬車中に寝るんだ、上に炭を置いてやる」

ちよつとたつたかと思うと、盗賊たちがきたのよ、駒をとばして。女の子が通らなかつたかつて訊くの、そういう子を見なかつたかつて、炭焼きがさ。

「見ませんでしたよ」

「よし、ひっくり返せ、馬車を」

「ええ、でも全部は勘弁して下さいよ」って彼がいうの、「おんなじですから。でも、また積んで下さいよね」

「そうか、それじゃあんまり手間のかかることをやっておれんな。二台目と、五台目と六台目をひっくり返そう」

三台目に娘が隠れてたのよ。その馬車の中に。

ところで彼はもう送り状をもつてたの、炭焼きは。娘は自分がどこからきたのか、あらかじめいつてあつたの。

「さ、注文を受けた炭を満載した。出かけよう」

ほんとにね、あくる日、それもまだ夜が明けないうちに運んでつてくれたのよ、この炭焼きは。

「うへえ、一体何がきたんだ？」

そしたら自分ちの娘が見えたの、炭のように黒くなって、何ももぶざまなのが。

「うちのマリドゥルが大変だ」

医者を呼んだり、またきれいにしたりしたの。一年したら、娘はまたすっかり元通りになつたんだって。

どういえばいいのかしらね。ここは水車場で居酒屋も兼ねてた

んだって。だつてそのあたりはへんびなところでね、人の話じゃいろんな事があつたんだって。ジプシーとか研ぎ師たちがやってきたんだって。いろんな商人が、みんなが落ち合つたんだって。

で、ある時、油をのつけた馬車がたくさんきてね。店の娘は休む暇ない忙しさだった。お酒を取りに急いで地下室にいったの。

そしたら声が聞こえたのよ。「そろそろいい頃かい？」「そうだな」って娘はいつたの、「もうちよつと待ってくれ」

走つて、いくつか油入れに、油の入れ物に熱い油を入れてさ、そこらじゅうの注ぎ口にあげてやつたんだって。それで運中は窒息するしかなかったんだって。その中には盗賊ばかり入つてたのよ。そしてね、一人が、盗賊のおかしらが店中に座つたの。それですぐ父親にちよつと知らせてね、そいつは早速縛られてつれていかれたんだって。軍隊と警察が呼ばれてね、盗賊のうちはきれいなからつぽにしてこわされちやつたんだって。あとはどうなつたのか、私にはもうわかんない。

この話をシュヴァルトツお婆さんは二〇年前の一九五四年にもカール・ハイディングに語っている（『オーストリアの昔話』三弥井書店、二二二頁¹⁸）。その時の話に比べると彼女の記憶が衰え、脱落と飛躍があつてわかりにくくなつているところがあるが、その時になくて今度出てきて詳しくなつたところもある。キッドの艶皮の手袋（Glasé-Handschuh = Glacéhandschuh）という、お婆さんには不似合いなフランス語まじりの言葉が新しく出てきたし、「開け、

「井」も出てきた。炭焼きの馬車が以前の一台から一挙に六台にやえている。送り状 (Aviso=Aviso=Avis) のような経済用語も出てくる。頭 (den Kopf) と「わすれ」かしろ (in Schadel) とか、馬 (den Pferd) と「わすれに駒 (de Ros) というように古風な語も使われている。

また盗賊の首を切り落とす刃物をハイディングはサーベル (einen Säbel) と聴かしているが、お婆さんが亡くなったあと、この村の中学校長をしているヨーゼフ・プフナー (Josef Puchner) さんに訊くと、彼はこの語を Sappel (= Sappel) だと云う。b と p は一九世紀に出たシメラーの『バイエルン方言辞典』(Schmeller, J.A.: Bayerisches Wörterbuch, 2Bde.) や、ウンガーの『シニタイヤーマルク方言辞典』(Tinger, Th.: Steirischer Wortschatz) で b の項目に p が含まれているように、両者はまぎらわしく今でもオーストリア人自身でも聴き間違えていることがあるから、これをサーベルととるか、木こりの道具、とび口ととるか、微妙だが、他の諸例からするとサーベルであるように思える。しかしこの一語の解釈は翻字の難しさも暗示している。

「バサツ bunstl」という純粋な擬声語が出てくるのも興味がある。グリムを初めドイツ語の昔話には音を現わす名詞や動詞などが出てくるが、それらとは別個に擬声語が出てくることは非常に少ない。ところが児童文学の作品にはそういう擬声語が時々出てくるのだから、ないことはないのである。それがシニヴァルトお婆さんの話には出てくる。彼女の語ったほかの話にもよく擬声語が出てくる。こういう例からすると、ドイツ語の昔話でも実際の語りで擬声語の使

用があったのに省かれてしまったのではないか、という疑いが出てくる。シニヴァルトお婆さんの語りに限らず私の会った語り手たちの語り口からすると、どうもドイツ語圏のテキストはかなり整理されているのではないかという気がする。信頼するハイディングのテキストでもそれを感じることがあるが、そのハイディングが信頼しなかったテキストもあり、語り手から聴いた話に手を加える程度は時代を遡るほど大きくなっていそである。

しかしシニヴァルトお婆さんの話の構造は全体として二〇年前と驚くほど変わっていない。初めから終りまで細部を忘れているように見えて忘れている。

水車場が居酒屋を兼ねていたというのは二〇年前にも語られていたが、それはこの地方に実際にとても多くあったそうである。私自身は水車場が今は居酒屋になっている店を一例知っているに過ぎないのだが。村のヴィルトハウスは小さい店も大きい店もあり、居酒屋だけの店もあれば食堂を兼ねる店もあり、さらには宿屋を兼ねている店もあって実態は一樣でない。ジプシーや研ぎ師たちがやってきたというのが、この人たちはうさんくさく見られていた人たちである。ドイツの『シニタイナウ町史』によると、いかけ直し、食器売り、籠、笠編みをよそおったジプシーが盗みを重ねていたので、町当局は一六一四年鍋かま屋によそ者を泊めないようにと命じていたし、一七四五年には怪しい客を泊めたかどで罰を受けた人もいる¹⁹⁾。

シニヴァルトお婆さんの話を組み立てている個々の要素はここでも現実に根ざしていたのである。話の背景にあるものがどれも現実にあったもので、聴き手はいかにもあったこととして感情移入

して話に熱中できたのかもしれないという気がする。

ところがシュヴァルトお婆さんの家があつたあたりは小高い山のぼつたところにあつた。水車場を作れるほどの川も下の方に流れていない。でもシュヴァルトお婆さんの家のすぐ横にある城の廃墟の修理を始めた人たちが出しているパンフレット、「ヴィンデッガー・ゲシェーエン」(一九八五年二月)所収のマイベックの「シュヴェアトベルク水車屋組合」に依ると、この辺には記録に残る一六世紀以降三二軒の水車場があつた。水車が止まつたのは一九〇〇年ごろ、一九三〇年ごろ、そして最も多くは一九四五年から六〇年にかけてのことだつた。しかしヴィンデッガーからシュヴェアトベルクにおりれば、アイスト川沿いに水車場があり、遠い未知のところの話でも、情景をすぐに想起できたのである。しかも彼女の場合、鍛冶屋の生家があつた同じ村内のヨーゼフスタールには水車場が三軒あり、二軒は廃たれ、一軒は一部を大水で流され、今は工場となつて⁽²⁰⁾いる。鍛冶屋も水車を使つていたし、大水が出た時のことは彼女がよく語つていたことだつた。それに生家は一時居酒屋をやつていたし、語り手とこの話との結びつきは生活史をたどつていくと思いの外深い。

ドイツ語圏全体の語り手の伝承から見れば、彼女などとするに足りない一語り手に過ぎない。しかしすぐれた語り手たちが話だけを残り、あるいはその僅かな生活の断片しか伝わっていない今、彼女は私にとっては貴重な語り手だつた。彼女のことを思うと、私はどうしても昔話を語り手と聴き手の生活と切り離して考えることができなないのである。

私に「気丈な水車屋の娘と盗賊たち」の話を語つてくれたのは彼女ばかりではない。彼女のすぐそばの居酒屋の老女主人ヘレーネ・ホッホライターさん(Helene Hochreiter)もそうだつた(『昔話―研究と資料―』第五号、一九七六年、彼女は三弥井書店)。声の柔かい、優しいお婆さんである。彼女の話では盗賊はたった一人しか入つてこないが、おので(初めは「なたで、おので」とお婆さんは迷つている)切り損なう。ここから三〇数キロ先のケーニヒスヴィーゼンのシュトッカーお婆さんも、声の明るい、よく笑うお婆さん。この残酷な話を語つていた。このお婆さんの場合は盗賊の首を切つたというだけで、刃物にはふれない。隠れる馬車は干し草の馬車である。

この話をもっと早く世紀転換期ごろ、他の州でも語られていた。シュタイヤーマルク州「二人の盗賊と水車場の娘」がそれである(『世界の民話28オーストリア』一九八五、ぎょうせい)。⁽²¹⁾一九三〇年代の採話にはケルンテン州の「ゲルトルトと二人の盗賊」、ブルゲンラント州の「水車屋の下女と盗賊たち」がある。前者はサーベルで一人の盗賊の首を切り落とし、後者では大鎌で切り落とし、唐檜の皮を積んだ馬車に隠れる。⁽²²⁾

こう見てくると、この話がかつてオーストリア全土でそれぞれ土着化されながら語られていたのかもしれないという気がしてくる。さらにハイディングの『オーバーエスターライヒ州の昔話と笑話』には、シュヴァルトお婆さんのほか、七人の語り手が同時期に語つたこの話が収められている(もう一話あるが、それは戦前か戦中か時期不明のデビニーの採話)。それらはみんなオーバーエスターラ

イヒ州のうちのミュールフィアテルという地方で採話しただけなのにこれだけ集まっているのである。「オーストリアの昔話」三弥井書店、一四、五四、六五、六八、七六、八三、八四番。

これだけ濃密に分布するのは何故なのか。

訳書に入っていない一九六五年の採話、「盗賊と水車屋の娘」では、水車屋の人たちがミサにいった留守に、盗賊たちがはしごを掛けて入ろうとし、娘がなだ首を打ち落とす。やがて求婚にきた男を父親が許して、娘は森の城へいく。途中彼女はしらみ取りを頼まれ、傷跡を見てあの盗賊だったと気づく。城には入ってはいけないう部屋があったが、あいていたので入ってみると、ベッドと肉切り台がある。そこへ盗賊が帰ってきたのであわててベッドの下に隠れる。すると盗賊がさらってきた娘の指輪をはめた指を切る。それが彼女のところに飛んでくる。彼女は逃げ帰り（逃げ帰る部分は二行しかない）、盗賊は軍隊と警察に手配される。彼女は何食わぬ顔できた一味に夢の話として体験を語って聞かせる。一味はこの場にいる者も城に残っていた者もことごとくつかまる。

このユングバウアーお婆さん（一八九〇年生れ）が語った話は明らかにグリムの「盗賊婿」と結びついている。彼女はボヘミアの生まれで、小さいころそこで覚えた話だという。フォイスナー老人の「水車場の娘と盗賊たち」（前掲訳書七六番）はしかし同じ構造をもちながら、もっと生き生きと語られている。

「盗賊婿」は前掲訳書の「青ひげ伯爵」（一四）、「器量よしの給仕娘」（五四）のように単独で伝えられる場合と、このように気丈な水車屋の娘の話の中に組みこまれている場合と二つの場合がある。

のである。

シュヴァルトお婆さんたちの気丈な水車屋の娘の話では、盗賊の首を切り落とす前半と盗賊の家からどう逃げ帰ったかを語ったが、フォイスナー老人たちの語りでは中間に盗賊の根城の恐怖と逮捕の証拠を握る部分に加わって、物語性を高めている。

逆にいえば、グリムの「盗賊婿」は水車屋の娘の気丈な働きを欠いた話といえるかもしれないのである。冒頭を欠いたところから話が始まっていたのかもしれないのである。

オーストリアの現代の「盗賊婿」である「青ひげ伯爵」に登場するのは、村の宿屋の娘、「器量よしの給仕娘」に登場するのは兼居酒屋の娘だった。シュヴァルトお婆さんの話の娘が水車屋の娘であるだろう。それにシュヴェアトベルク村の或る店は一〇年前まではヴィルツハウスを名乗っていたのに、今は古くさいからとガストハウスに変えてしまった。ヴィルツハウスとガストハウスは同義語といっている。

水車場の娘の話に出てくる娘は大抵がその家の娘となっている。中にはヘッセン、ベッサラビア、ハンガリー（語り手の先祖の地はオーストリアのニーダーエスターライヒ州）、ハンガリーに隣接するブルゲンラント州の諸例のように下女となっているものもある。王女↓水車屋の娘↓下女と図式的に見ることができればいいが、これは容易に決めがたい。

ところで彼女が一人で留守番をしていたので事件が起こるのだが、各話には一人となった理由がつけられている。それを振り返ってみると、

一九世紀ヘッセンの話では家族が結婚式にいったので下女が留守番をしている。現代ではどうなっているかという点、ベッサラビアの話ではただ両親が留守、ハンガリーの話では旅行だった。それが東プロイセンの話では日曜日となっているし、ウクライナでは教会へいったとなっている。東プロイセンの日曜日もどこかへ遊びに出かけたというより教会へいったということなのかもしれない。

しかし、ベッサラビアのもう一つの話とオーストリアの話九話は全部ミサとか、クリスマス前夜のミサとなっている。この話は圧倒的にクリスマス前夜のミサが発端となっていたのである。偶然か、プロテスタントの多いヘッセンの話では結婚式だったのに対し、カトリックの信仰が行われているオーストリアではクリスマス前夜のミサとなっていた。これはもつと根が深いのかもしれない。

グリムの「盗賊婿」ではいつとも知れなかった季節がこうなるとはつきりしてくる。冬の話になってくる。おまけにシュヴェアトベルク村の語り手たちは、ヴィンデンでもヴィンデッグでも昔話は冬に語ったといっている。夏は農作業が忙しくて語っている暇がなかったのも、もつと冬に語り、聴いたと証言している。この話はクリスマス前夜が出てくることによって、冬に語るにふさわしい話だったことになる。

でもクリスマス前夜の夜半ミサに、人々はこの話に出てくるようにほんとはそんなにしかけていったのか？ 現代はキリスト教の信仰が衰えているといわれているが、私が経験した一九八五年のシュヴェアトベルクの夜半ミサでは老壮年の人たちはばかりでなく、若い男性、女性、子どもまで入れきれないほどの人が教会にあふれていた。

た。シュタイヤーマルク州の村で経験した復活祭の時より——この時もいっぱいだったが——もつと多かった。復活祭の時より寒く、しかも真夜中なのである。私が下宿していたヴィンデンの家では若者はシュヴェアトベルクの教会にいかずに、山道を登っていく、はるかに遠い隣り村の教会まで出かけた。家はからっぽになった。だから、ひよつとしたらこの時間帯は狙いをつけた家に現実に入り易かったのかもしれない。教会のない集落の人たちが教会のあるところまで往復するのは、便利な交通手段のなかった昔ではかなり時間がかかったらう。雪道であれば、そしてその雪道が凍っていれば山道などはいよいよ大変になる。

この雪の不利は盗賊にとつても打撃になる。雪の上の足跡はすぐに彼らの巢窟をばらしてしまうだろう。

でも何故よりによって盗賊はクリスマス前夜に水車場をやってくるのか、もふしぎである。オーストリアの現代の語り手たちはクリスマス前夜のミサを他の理由に置き換えない。それをふしぎともみなさない。

思えば冬は「よそ者」がよくやってくる季節であった。私の見た例ではザルトツカンマーグートのバート・ミッテルンドルフ Bad Mitterndorf や、エンス谷のドンナースバッハヴァルト Donnersbachwald では十二月六日の聖ニコラウスの祝日の前夜、聖ニコラウスの一行が家々（今は宿屋か、広場）を訪れる。バート・ミッテルンドルフでは今でも十二月二十六日には若者が若い女の家にいき、パンのはじをやって好意を伝え、若い女はいくつもらったとうれしがる。十二月二十八日は罪なき聖嬰児の記念日で、朝早くから子ども

たちが白樺の枝をもつて次々に村の家々にやってきて唱え言をいう。子どもたちがきた家々ではそんな彼らに用意していたチョコレート、オレンジ、ボンボン、お金などをやる。十二月三一日の大みそかもなれば香をたき、ろうそくをともし、もみの小枝を水にひたし、屋根裏部屋から地下室まで各部屋を回って悪霊退散のお払いをする。一月五日になると、十二月二八日の時よりもうちよつと大きい子どもたち、鈴鳴らし Glöckler といわれる子どもたちが（もう鈴をつけていないが）唱え言をいってお菓子をもらいにくる。そして夕方になると、また家々では大みそかの時のようにお香をたいてお払いをする（これは十二月二四日にも行われる）。そして夜になると顔全面に麻をたらした黒装束の団がきて無言のまま台所をきれいにしているかと点検し、それが終ると飲んだり、食べたりしていく。

彼女たちはベルヒテン Perchten といわれるから古代信仰にかかわる存在だろう。そして一月六日がくる。この日は東方の三博士の来訪を記念する、主の公現の祝日である。この日のために仮装した三人の娘たちがもう年の暮れから村の家々を回って祝福し、玄関のチョコークの年号を書き改めていくのである。

このように、冬のこの季節は家の中に「よそ者」が入ってくる時なのである。よそ者はキリスト教のよそおいをもちながら、もっと古い信仰のたたずまいをもっている。

クリスマス前夜に現れる盗賊もひよつとしたらこうした冬の行事に残る信仰と、どこでかかわるのではないか、という気がしてくる。ここで飛躍するが、例えばゲルマン神話の故地アイスランドには、トロルがクリスマス前夜に登場する話がある。「妖精の王妃ヒ

ルドゥル」でも「作男と水妖たち」でも、クリスマス前夜に留守番をしていた者がトロルに殺害される。そんな時に話の主人公が登場して事態が変わる。「ギェトリヴェル」「夜のトロル」「ヴェストマンナエイヤルの魔法使い」「マウルム島の女主人」「フルーニのダンス」「エイヤファイヨルドの太陽シググリーズル」「利口なフィンナの物語」というように、アイスランドの話ではクリスマス前夜ないしクリスマスにふしぎな事が起こり、人々は魔的存在のいることを意識させられるのである（『アイスランドの昔話』ヨウン・アウトナソン編、菅原邦城訳、昭和五四年、三弥井書店。クリスマスに、つまりキリスト教化された冬至祭に古い神々が現れて、それを二重の祝祭とし、さらには復権を目ざそうとするかのようにである。アイスランドではこの時期に人間が危機を迎えるのに、オーストリアでは逆に「よそ者」が殺害される。まるでカトリックの信仰の揺るぎなさを示すようにである。

この話では異境の人間、異境の存在との婚姻が否定される。危険な異境人との結びつきは認められないで終る。水車場の娘が盗賊を退治して流す血は、グリムの「盗賊婿」が流す血のような生ま生ましさがない。異質の血が問われているように容易に相手を仆すことができ、語り手はむごさを意識しない。ただ娘の勇ましさを讃えているのである。

この猛々しい巻頭の部分をもたないグリムの「盗賊婿」では、女主人公はもっと穏和になり、耐え忍ぶ受苦の女性となる。人々が「盗賊婿」をあまじく記憶しようとしなかったのも、あるいはこうした女主人公の受身一方の生き方に物足りなさを感じたのかもしれない

い。その意識が時代の流れと共に強くなつて、水車場の娘の勇気
を好んだのかも知れない。

けれどもその水車場の娘も、森へ入ると弱くなり、自分の家へ見
せた勇気を急に失つてしまふ。あとにはたすら逃げまどくだけにならぬ。
前半と後半は著しく対照的なもの。前半は巫女のまじりこひつゝ雄々
しかった彼女が、森を境に自分ひとりでは相手に立ち向かえなごう
うな、身の回りの者や他人を頼る普通の娘になつて帰つてくべき。
こんな変化も人々にこの型が歓迎された理由かも知れない。

邦

- (1) Schmidt, K.: Die Entwicklung der Grimmschen Kin-
der und Hausmärchen. Halle 1982. S. 171 ff.
- (2) Rölleke, H.: Fabula 18, 1977, S. 105-116.
- (3) Rölleke, H.: Die älteste Märchensammlung der Brüder
Grimm. Cologny-Genève 1975. S. 234.
- (4) Rölleke, H.: a. a. O. S. 235.
- (5) Rölleke, H. (Hrsg.): Brüder Grimms Kinder- und Haus-
märchen. Erster Band. Nach der zweiten vermehrten und
verbesserten Auflage von 1819. Köln 1982. S. 147.
- (6) Rölleke, H. (Hrsg.): Brüder Grimms Kinder- und Haus-
märchen. Band 3. Stuttgart 1980. S. 80.
- (7) Bole, J./G. Polivka: Anmerkungen zu den Kinder- und
Hausmärchen der Brüder Grimm. Bd. 1. Hildesheim 19
63. S. 370.

(8) Kühnert, A.: Fast vergessene Berufe. Schlüchtrn 19
77. S. 155 ff.

(9) Hartmann, E.: Geschichte der Stadt und des Amtes
Stein a. d. Straße. Bd. 3. Stein a. d. Straße 1977.
S. 366 ff.

(10) Küther, C.: Räuber und Ganner in Deutschland. Das
organisierte Bandwesen im 18. und frühen 19. Jahrhun-
dert. Göttingen 1976. S. 19, 39, 44, 49 und 77.

(11) Meyer, E.: Deutsche Volksmärchen aus Schwaben. Aus
dem Munde des Volkes gesammelt und herausgegeben.
Stuttgart 1852. S. 224 ff.

(12) BP.: a. a. O. S. 373.

(13) Hoffmeister, Ph.: Hessische Volksdichtung in Sagen
und Märchen, Schwänken und Schnurren, Marburg 1869.

(14) Gramas, G.: Volk aus dem Ordenslande Preussen er-
zählt Sagen, Märchen und Schwänke. Marburg 1960. S.
86 ff.

(15) Cammann, A.: Deutsche Volksmärchen aus Rußland
und Rumänien. Göttingen 1967. S. 374 ff.

(16) Henssen, G.: Ungarische Volksüberlieferungen. Erzäh-
lungen und Lieder. Marburg 1959. S. 204 ff.

(17) 原文の翻字は「ドイツ文化」(中央大学) 53号 1988. 参照.

(18) Haiding, K.: Märchen und Schwänke aus Oberösterrei-
ch. Berlin 1969. Nr. 72. S. 90 f.

- (19) Hartmann, F. : a. a. O. S. 366.
- (20) Mayböck, L. : Die Schwetberger Müllerzunft. in : windegger Geschehen. 7. Ausg. 1985.
- (21) Reiffenstein, I. (Hrsg.) : Österreichische Märchen. Düsseldorf-Köln 1979.
- (22) Haiding, K. : Österreichs Märchenschatz. Graz 1969. S. 293 ff.
- (23) Haiding, K. : Märchen und Schwänke aus dem Burgenland. Graz 1977. S. 90 ff.

(さいとう・みちお／中央大学)